

変われるか

とんだ玉三郎

本郷大学の西洋史学科に籍をおく相川教授は高校時代からの友人で東京アーバン大学の理事長をしている安田に会うことにした。

「久しぶりだな。本郷大の教授が三流大学の理事長になんの用事だよ」

「実は俺の研究室にいる助手をお前の大学で雇ってもらえないか、と思ってね。専攻は西欧の近代史だ」

「え、本当か、天下の本郷大から、俺のようなところに来てくれるというのか」

「まだ、本人には話してないが、待遇もそれなりにしてくれば納得すると思う。優秀な奴だよ」

「そりゃそうだろう。当然、本郷大出なんだろう。もちろん、来てくれれば、それなりの待遇で迎えるよ。教授というわけにはいかないが、まず、常勤講師として迎えよう。個室も準備するよ。ところで、その人、女でトラブルを起こしたとか、暴力沙汰があったとか、訳ありじゃないだろうね」

「そういう心配はないよ」

「話がうま過ぎるように聞こえるがいい話だ。大学の宣伝にもなる。さっそく『本学に本郷大出の先生が常勤講師として着任』とホームページに載せよう。ところで、腰掛なんだろうね、そんなに優秀なら数年で本郷大に戻せ、ということだろう」

と安田は上機嫌だった。

「いや、そのつもりはない、少なくとも俺が本郷大に在職中はな。でも、本人には数年で戻す、と言うつもりだ」

それを聞いて、安田は相川と及川の間の確執があることを知った。

安田の大学、東京アーバン大学は彼の父親が創設者で、団塊の世代のジュニアが大学に入る頃に学生増加に対応して雨後の筍のように新設された大学のひとつである。昨今の少子化で若者の数が減り、大学間で学生獲得競争が激化している。本郷大を頂点に、学生は偏差値の高い大学から埋まっていくので、偏差値の低い東京アーバン大学などはガラガラになって、いつも定員割れになってしまふのだ。そこで客寄せパンダではないが、有名大学出の教師を雇ったり

タレントやオリンピックピックのメダル獲得者などを特任講師として迎えたりして学生集めにやっきとなっているのだ。

数週間ほど前のことだった。相川の主催しているゼミでのことである。相川その他、准教授の後藤、助手の及川を含め、大学院の学生、数人と議論していたところ、及川が滔々と自論を述べだした。

「イギリスの衰退要因に、『成功したイギリス人の商人はジェントリー、すなわち下級貴族の真似をして田舎に土地を買って遊んで暮らす、それで経済の発展がとまった』との説が日本ではもてはやされてきた。それは間違いだと思うよ」

とすると、後藤准教授が反論した。

「相川先生はじめ、日本の史学会ではそれは数ある要因のひとつという主張をしている」

と、この論を主唱する相川を弁護する発言をした。

すると、及川は遮って言った。

「安政義塾大学の春山教授も言っているように、その論はイギリス人の余裕のある生き方に劣等感を持っていた明治時代の日本人、固有のものだった。それがそのまま残ったものだ。もっと情緒的なものでなく、長期に亘る貿易赤字、農業市場開放による大量の食糧輸入、既得権構造の固定などがイギリス衰退の根本要因だよ」

及川は真っ向から相川の主唱する論に反論を唱えた。それも、学生たちのいる前でのことだ。及川の言っている論は最近では学者の間でも国内外を通じて支持が広がりつつあるがプライドの高い相川としては我慢がならなかった。しかし、学生たちの手前、感情を抑えながら言った。

「いろんな意見があることは結構なことだ。しかし、一方を切り捨てるような言い方はしないほうがいい」

相川は及川があまりにも自己顕示欲が強い、これまでもそういうことがあった。優秀だが、残念なことだ。主任教授の相川の意見とはまったく異なる論を論文に発表したこともあった。自分の研究室においておくと禍根残すだろう。それで、頭に浮かんだのが安田の顔であった。

相川は及川を呼びつけて言った。

「君には少しの間、外に出て勉強してもらおう。他流試合もいいものだ。私の

知っている大学の理事長に打診したら、君さえよければ受け入れてくれそうだ。もちろん、待遇は今より断然いいはずだ。それに君は優秀だ。数年で呼び戻すつもりだ。その理事長にもそう言うてあるし、相手も納得済だ」

及川は狐につままれたように感じたが、助手の少ない給料に汲々としていたし、給料があがれば本ももつと買えるし、数年で戻してくれるなら、あながち悪い話でもないなと思った。そこで訊いた。

「お話はだいたい分かりました。いずれ、戻れるんですね」

「当然だよ」

「ところで、その大学は地方ではないでしょうね」

「いや、埼玉にある。東京アーバン大学だ」

「え、最近出来たんですね。私は名前も聞いたこともないです」

「最近できたのでもないんだ。前は埼玉都市大学と言ったのだが、最近、東京アーバン大学に名前を変えたらしい」

相川は、東京アーバン大学の実態を知って及川がおじけづくのではないかとちよつと不安だった。

「埼玉都市大学なら聞いたことがあります。そうですか、名前を変えたんですね」

及川は埼玉都市大学が最低ランクの大学のひとつだとの認識だったのでがっかりしたが、表情に出さなかった。理事長の安田は埼玉という学生が集まりにくいと考えて、大学名に『東京』を入れて東京アーバン大学に変更したのだった。都心にあるビルの一区画を借りて、『東京キャンパス』として東京にある大学のような形を作り、本拠を構える埼玉のほうは「埼玉キャンパス」とした。地方から来る学生は大学名に「東京」と冠すれば集まりやすいのだった。東京アーバン大学のレベルの大学では学生は勉強するのが目的でなく、都会で遊ぶことが目当てだ、遊ぶなら東京がいい。

及川は相川から東京アーバン大学への転出の話聞いて数日後、高校時代の先輩で、安政義塾大学を出て東京インテリジェンス大学の准教授をしている佐伯に会った。彼は社会学を専攻していて、大学教育にも関心が深かった。

「お前、東京アーバン大学に移るんだって。よく承知したな。大変なところだぞ」

「かなりランクの低い大学とは聞いています。しかし、給料は今の倍は出るし、数年で戻れる、というんで承知したんですよ」

「そうか。でも、口約束は信用できんぞ。お前のところの主任教授はどんな人

かしらないが」

「世間の風にあたって、勉強してこいということなんだと思います」

「俺も安政義塾大学からこの大学にきたろう。最初は学生の程度の低さにびっくりだったよ。東京アーバン大学は俺のところよりもっとランクが下だからな」

と、佐伯は同情するように言った。

「そんな大学なら、学生から鋭い質問もないでしょうから授業の準備も多少手を抜けるだろうと思います。その分、本郷大の研究室に戻った時に備えてじっくりと勉強しますよ」

及川は自分に言い聞かせるようにいった。

高校や予備校の間では大学のランク付けは入学試験合格の偏差値で決まるとされている。偏差値五十で平均値、すなわち受験生全体の半分が偏差値五十以上、五十パーセント以下が残りの半分ということになっている。東京アーバン大学はもちろん偏差値五十以下である。このクラスの大学の入学案内には軒並みに「本学の入学偏差値は四十〜四十五」と書かれている。しかし、実際はこのクラスの大学では入学試験などないから、偏差値に関係なく誰でも入れるのである。慢性的な定員割れであるから、入学して授業料さえ払ってくれば大学側は大歓迎なのである。

「そうそう、俺の大学に最近まで東京アーバン大学で教えていたことがある奴がいるから紹介してやろうか」

「事前に少しは事情を知っておいたほうがよさそうですねからお願いします」

及川は佐伯の紹介で東京インテリジェンス大学の講師で、つい最近まで東京アーバン大学の非常勤講師をしていたという男、土井に会った。土井と話をしているうちに、及川の高校の一年後輩であることを知った。それもあって土井は包み隠さずに話してくれた。

「佐伯准教授から『今度、本郷大出身の先生が東京アーバン大学に行く』と聞いてびっくりしました」

「授業などに進め方の参考になることがあれば教えていただけますか」

「学生はアルバイトの時間以外はだいたい授業には出てますね。でも寝ているか、スマホをいじっているか、友達としゃべっているかですよ」

「そんな状態ですか。それでよく単位がとれますね」

「授業料を払っているのだから単位をくれるのは当然と知っているんでしよう。彼らは勉強をほとんどしてないようです。でも単位をやらないと大学側からクレームが出るのです」

及川は、単位をやらないと大学からクレームが出る、ということは理解不能だったが、佐伯にお礼を言った。

「参考になります。ありがとうございます」

「ああ、それから当然のことですが、ここだけの話にしておいてくださいね。もし、外に漏れると『本学を誹謗中傷した』と名誉毀損で訴えられる恐れがありますので、ご注意ください」

「もちろん、承知しております」

及川は東京アーバン大学での奉職が決まり、理事長の安田に会った。

「相川教授に貴方のことを聞きました。本学に来て頂けるとのこと、光栄に思っています。相川教授も言っていましたように、いずれは本郷大学に戻ってもらう優秀な人材とのことなので長くても数年のお付き合いでしょうが宜しくお願います」

「いえ、こちらこそお世話になります。私はさいたま市に住んでいますので、通勤は今よりずっと楽になります」

「御存じかと思いますが、本学は一九九〇年の創立以来、最近まで埼玉都市大学と称していました」

「そうですか『東京』に変えたのですか。そう言えば、最近『東京〇〇大学』という名前の大学が増えたようですね」

「ところで待遇ですが、講師ということで処遇させてもらいます。常勤ですの で先生専用の個室を用意しますのでご自由にお使ください。それに給与は本学の基準によって支払います。今の本郷大学での額の倍近くは出せると思いま す」

及川は相川から聞いていたので驚かなかったがお礼を言った。

「ありがとうございます」

及川は、博士過程を出ても定職につけなくて、いくつかの大学の非常勤講師を掛け持ちしてまわっている先輩のことを思い出した。彼らには個室は与えられないし、いつ首を切られるかも知れない。フリーターのようなものだ、とぼやいていた。それに比べると恵まれたほうだと思わざるを得なかった。

「御承知でしょうが、本学に通う学生の学力レベルは本郷大学などとは比べも

のになりませんから、教材などもそのつもりで準備ください」

「承知しました」

「それに本学のモットーは退学者をなるべく少なくして、多くの学生をちゃんと卒業させ、世に送り出すことです」

及川は単位をフリーパス同然にやれ、ということだと知り、佐伯の言った言葉の意味が理解出来た。

「本学の学内向けと学外向けのホームページに先生の経歴などをさっそく紹介させて頂きますのでよろしくお願いします。広報担当が紹介記事を持ってまいりますので、ご確認してもらい、よろしければホームページにアップします」

「承知しました」

東京アーバン大学の二年生の古田は、友人の馬場との話でさっそく、新しくきた及川講師のことを話題にした。

「おい、大学のホームページ見たか、今度きた西洋史とかいう講座の先生、本郷大出だよ」

「え、本当か、まだ、見てなかった」

「本郷大出って、いったいどんな顔をしているか見たいのでその授業、出てみないか」

「そうだ、本郷大出の人など見たことがないな。人種が違うのかな。頭が異常にでかいとか、瓶の底のようなメガネをかけているとか」

「マンガじゃあるまいし、そんなことはないだろう。でも一度、見てみたいな」

古田や馬場のような学生が多いのか、及川は最初の講義で教室がほぼ一杯だったのでびっくりした。しかし、二回目の講義から減った。確かに教室で寝ている学生が多い。途中で教室を無断で出て行く者もいる。なかにはスナック菓子を食べながら、おしゃべりに夢中な学生もいる。流石に、教室での飲食はまずいと思っ注意した。

その翌日のことである。及川は大学の事務局長に呼びとめられた。

「及川先生、昨日、女子学生に注意したでしょう」

「ええ、教室で授業中にスナック菓子を食べながら隣の人としゃべっていたので注意しました」

「その学生が訴えてきたんです。授業料を払っているのだから、教室を自由に

使うのは当たり前だろう。いやなら、学校やめる、というんですよ」

及川はなにを言っているのか分からなかったが住む世界が違うとしか思うほかなかった。

「理事長から聞いたと思いますが、本学のモットーは『退学者をなるだけ少なくして、多くの学生をちゃんと卒業させ、世に送り出すこと』なのです」

「退学されたら困るといふことですか」

「そうです。本学は文科省から少しの助成をもらっていますが、授業料で運営されています。退学者が増えると収入が減って、先生方へ給料が払えなくなる恐れがあります。先生がいらした本郷大学などは全く違うのです」

「そうですか。お客様、いや学生様は神様ってことですか」

と及川は嫌味を込めて自嘲気味に言った。

及川はしばらくして、佐伯に会った。

「いや、聞きしに勝ると思っていましたが、驚きました。あれじゃ大学とは名ばかりですね。幼稚園のほうがましだと思います」

「俺も土井君から話を聞いたときには、ウソだろう、と思ったよ。あれでも、文科省からいくらなりとも助成金が出ているんだからな」

「東京アーバン大学の事務局長もそう言っていました」

「それに奨学金をもらっている学生も意外に多いというから驚くね」

「え、勉強するわけないから、奨学金を生活資金にするのですかね」

「いやいや、呑み代やギャンブルなど遊びだよ。遊ぶ金欲しさにキャバクラに出ている女学生もけっこう多いらしい」

「でも、いずれ奨学金は返さなければならぬでしょう」

「卒業してもまともな職にはありつけないから、借金まみれだ」

「給付型の奨学金など、遊びに使われるなら意味ないですね」

「返済免除の給付型の奨学金をもっと拡大しろ、なんて言うのは現場のことを分かってない人気取りしか考えない政治家だけだよ。もっとも文科省も分かってないがね。金を捨てているようなものだ」

「どうしてこういうことになったのですかね」

「団塊ジュニアが大学に入る頃、一九九〇年くらいだったか、新設の大学をどんどん作ったがその後少子化が進み、子供の数が減ったのに逆に大学生は増えているんだ」

「じゃ、学力レベルの低い学生が入ってくるのも当然ですよ」

「学生の数を増やさないと経営が成り立たないから、試験なしで入学させて、四年間授業料を納めてもらって卒業させるってわけだ」

「でも、そんな学生、社会に出ても使いものにならないじゃないか」

「だいたい、皆、パートやフリーターになるんだよ。また、自覚したヤツは専門学校に入り直すとかね」

「それなら、大学に行かずに、最初から専門学校に行けばいいのに、と思いませんが」

「その子たちの親を見るとわかるが、ほとんどが学歴は高卒以下だ。せめて、自分の子には大学に行かせたいと思うんだよ。中味はともかくとしてね。地方出身が多いよ。東京の大学を出れば就職に有利と思っっているかどうかは知らないが」

「難しい問題なんですネ」

「文科省も大学が経営難で潰れば、補助金を配るといふ影響力がそがれるのでそのままがいいのだよ。もつとも、地方には潰れる大学が出てきている。地方の若者は遊ぶなら東京と、東京の大学に行きたがるからね。大学の数が減れば先生の職も減るから。大学が潰れては困る人が多いんだよ」

「僕たちもそのひとりすると文句はいえないですね」

及川は授業を数度、行ったが、いつも一番前の席に座ってノートを取りながら熱心に授業を聞いている女学生のが気になるようになっていた。この大学には珍しい存在である。

すると、ある日のこと、授業が終わってから、その学生が及川に声をかけました。

「私、篠田忍と言います。先生にちょっと聞きたいことがあるんですが」

「なんだね」

「先生の授業、理解しようとするのですが難し過ぎてよく分からないんです。

もつと勉強したいので、やさしい参考書を紹介して頂けないでしょうか」

「歴史は好きなのかね」

「中学の時には好きでした。でも高校の時に病気になり長く入院していたので、その間、勉強できなくて、わからなくなったんです」

「それなら、高校の教科書からやるんだね。それも分からないなら中学の教科書を見なさい。それに漫画でわかりやすく歴史を解説した本もでている。タイトルを後で知らせてあげるよ」

「ありがとうございます」

及川は、はたと考えた。この学生たちは、中学、高校といや、小学校まで遡っても、履修はしているが、自分のものとしてほとんど習得してないのだ。いきなり、大学の教科を習おうとしても所詮、無理なわけだ。バカらしいが中学程度のもを教えるしかない。そうすれば、篠田のような学生が興味を示してくれるだろう。給料をもらっているのだから、それくらいいいだろう。虚しく壁に向かって授業をするよりましだろう。そう考えるとややもやしたものが少しは晴れた。

彼らも可哀想だ。小学校、中学、高校と進む間のどこかの時点で授業についていけなくなり、勉強に興味をなくし、それ以降は分かりもしない授業を黙って座って聴かされて続けたわけだ。

彼らには分からなくなった段階まで後戻りさせればいいんだ。

及川は佐伯に会った時に、持論を述べると、佐伯が言った。

「分かるころまで、遡って学習をやりなおせ、と言うけれど、もっともその学生の学習意欲があることが前提だよ。それが無い奴には何をやっても同じだよ。また、大学で中学の教科書を使うわけにはいかないだろう」

「誰にも理解されない授業を壁に向かってやるよりはいいのではないでしょうか」

「そういう考えもあるかな」

「僕の教えている西洋史など、世の中に出て、なんの役にも立たないです。ごく一部の人は趣味として歴史小説を読むとき、あるいは映画やテレビなどで歴史ものを見る時に、覚えていれば役立つくらいでしょう。教える意義はどう考えたらいいのでしょうか」

「大学では自分の頭で物事を考える癖をつけることを学ぶことが第一だが、彼らはそれ以前の段階だろう」

「まず、知ることの喜びを学ばせることでしょうかね。知ったことが試験で試みされ、試験でいい点を取れば自信がつくんじゃないでしょうか。それが大きいと思います」

「彼らは受験を経験したことがないから、試験という関所を通らずにいままできたんだよ。やはり、試験は必要だよ」

「僕もそう思います」

「努力して勉強して、受験して、ある程度の点数をとって、どこかの大学に合

格すれば、自信になる。個人差があるので、目指す目標は様々だろうが」

「そうですね。社会に出て、『自分は苦労して受験にパスして認められたんだ』という自信は大きな財産になりますよね」

及川と佐伯の会話は教育談義に終始した。

及川は本郷大学時代の研究室の後輩たちと呑む機会があった。

後輩がポツンと言った。

「及川さん、本郷大に早く戻ってきてくださいよ。及川さんの独創的な発想、この研究室にはなくてはならないと思います」

及川は答えた。

「君たちとゼミで侃々諤々の議論をしていたところが懐かしいよ。でも相川教授に睨まれているから当分、無理だろうね」

及川は風の便りに、相川が『俺の目の黒いうちは、彼奴（及川）を呼び戻すことは絶対がない』と言っていたと聞き、本郷大への復帰はあきらめていた。すると西洋史に対する興味も薄れてきた。一方、東京アーバン大学で怠惰な学生たちを見ていると、佐伯と議論した教育学、社会学にだんだんと関心を持つようになった。そこで東京アーバン大学での勤務を続けながら、佐伯の出た安政義塾大学に時々、聴講に行き、社会学や教育学を勉強してみようという気になった。佐伯に相談すると快く便宜を図ってくれた。

及川は考えた。

昔は中卒、高卒で働く人は全体の八割以上いた。団塊の世代、今の七十代の男性の時代でもそんなものだった。それが今や、五割以上は大学に行く時代だ。いくら、世の中が発達して、職業も専門化、高度化したとは言え、大卒でないところせない仕事が増えたとはいえない。むしろ、ChatGPTのようなものも出てきたので大卒でなければ出来ない仕事はかえって減るのではないか。

一方、「大卒」と資格は同じでも学生間のレベル格差はすざましい。小学校から厳しい受験競争を勝ち抜き、厳しい入学試験競争を経て本郷大を頂点とする難関大学に入る者がいる一方、中学、高校と受験を経験することもなく入学、卒業してフリーパスで入れる大学に入る者も授業料を納めれば、「大卒」の資格を得ることが出来る。問題はこれら後者の学生だ。彼らはもっと早く社会に出てもいいし、出れるはずだ。中学の授業もろくに理解していないのに大学の

授業についていけない訳がないのだ。彼らにとって大学は奨学金をもらえ、たまにはバイトをして小遣い稼ぎをして遊んでいられるだから、これほど居心地のいいところはないのである。しかも、地方出身者は親の目から逃れて自由に出来る。これでは卒業後に世間に出るのが嫌になるはずだ。

今はエントリーシートを企業に送ることで、どんな大学を出ていても、どの企業の入社試験も受けることが出来るはずだ。及川は大学時代の友人で大手企業の人事課にいる者に採用にあたって東京アーバン大学のような大学の卒業者をどう見ているのか訊いてみた。その回答は次のようなものだった。

「ある一定レベル以下の大学の学生から送られてくるエントリーは自動的にネットですべて受け付けないシステムをとっている」とのことだった。さらに「東京アーバン大学クラスの大学の学生なら専門学校でなにか資格を身につけた学生を採用するほうがまし」ということも言っていた。

及川はおおげさだが、教育改革について構想を描いてみた。基本は次の五つだ。

- 一．教育コースを複線化して一部の者は社会に出る年齢を下げられるようにする。
- 二．社会に出てすぐに役立つことを教える（資格を取らせる）
- 三．社会に出ても、いつでも学び直しが出来る制度を作る
- 四．一度選択した教育コースを途中で変更することも可能にする
- 五．どこにいても学べるようにする

具体策として行きついたのは次のことだった。

- 一．大学は中学卒で入学させる。（高校は大学の教養課程か資格取得準備課程となる）
- 二．大学は一般大学と職業大学の二種類を設ける。
- 三．一般大学はある基準の学力に達した者だけを受け入れる。
- 四．職業大学では資格取得をすれば、年限が来なくても卒業できる
- 五．インターネットを使ったオンライン大学を普及させる（受講に学力制限なし）

これらのビジョンを佐伯に説明すると興味を持ってくれた。それから、数ヶ月してのことだった。佐伯から連絡があった。

「この前の選挙で。日本改革党が大幅に議席を増やして政権の座にいただろう。俺も大学の先輩の候補を応援していたのだが、その人も当選したんだ。その人は教育問題に関心が深いのでお前の提言を見せると、是非、会って話が聞きたいというのだ」

及川はまさか、自分の提案が日の目を見るとは思ってもみなかったのが驚いた。大風呂敷が簡単に実現するとは思わなかったが、政治家の目に止まったのは嬉しかった。また、悪平等が蔓延り、既得権益でがんじがらめになっている現状を変えるのはたやすいことではないことも十分に分かっていた。

(了 9537字)

参考資料 下流大学が日本を滅ぼす (三浦展著・ベスト新書)